

CS-114 セメスター制と10月入学制度導入による社会構造への挑戦

東洋大学工学部環境建設学科 正会員 石田 哲朗

1. はじめに

東洋大学工学部では、1994年4月から、セメスター制が導入され、その10月には第1期の10月入学生を受け入れることになった。これまでの帰国子女の受け入れ入試と違った日本初の画期的な入試制度の導入である。ところで、セメスター制度は教育改善のための一つの工夫として、文系を中心にすでに200大学（国立52、公立17、私立131）で実施されている制度である。この制度を簡単に説明すると、1年を2つのセメスター（例えば、春学期と秋学期）に分け、4年間で8つのセメスターを段階的に積み上げて卒業するシステムである。従って、半年毎に授業が完結し、試験が実施され、成績を評価することになる。また、学籍上の入学、進級、卒業、休学、復学、留学や学費の納入も全て半年単位で行われる。よって、10月入学も可能となる（図1）。では、このような制度を多くの大学が実施しながら、それらの大学が、なぜ10月入学制度を導入しないのかを、ここでは考えながら、本学における僅かばかりの経験を提供し、議論の糸口としたい。

2. セメスター制のメリットとデメリット

一般に言われるメリット、デメリットを列記すると次のようになる。

a. メリット

- (1) 授業科目の選択肢が増えて、各自の学習計画が立てられる。
- (2) 長期休暇が挟まらないので、集中力が維持できる。よって、教育効果が期待できる。
- (3) 授業の緊張感が薄れたりせず、休講も減少する。
- (4) 海外出張などの研究活動が、編成上変更が可能であり、都合がよい。
- (5) 飛び級制度が導入しやすい。
- (6) 外国の留学生を受け入れやすい。また、在学中に留学もしやすい。
- (7) 国際化社会への対応として、10月、9月入学制度が可能となる。

b. デメリット

- (1) 半年単位で完結するので、試験や成績等の事務処理が増加。
- (2) 事務部門でも、合理化・省力化が進まないに対応出来なくなる。
- (3) 時間割りの組み方や教室の配当など物理的な制約も受ける。

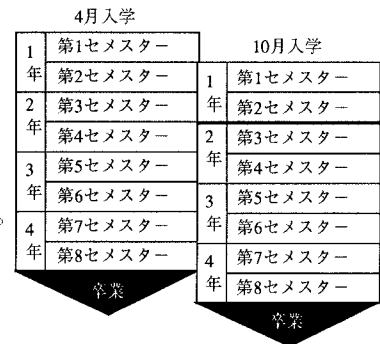


図1 セメスター制度の仕組み

上記の項目に対して、気づいた点を、個人的な感想として述べると、メリットの(1)、(2)は学生の側からみた。そして、まじめな学生なら、そうするであろうという意見である。受験戦争で予備校などの教育補助施設の“定食”を食べてきた学生には、それぞれが選択した専攻分野に必要な科目を、卒業後の進路に合わせて計画し、“献立表”を作るのは、なかなか難しいかも知れない（これは、現行の通年の科目でも同じことが言える）。つまり、時代の流れに、ただ乗ってさまよっているかのように思われる学生には期待はできない。もちろん、学年が上ぼるにつれて自覚は目覚めて行くのだが。

(3)、(4)は、教員側からの問題である。短期間に、シラバスに沿って、消化していくには、休講を極力避けなければならない。目的が時にははっきりしないような委員会に、ただ名前を連ねているだけで、存在価値（自己満足の範囲だが）を示しているようなことはできなくなる。(4)は、割と長期におよぶ学外での研究活動には、所属する講座や学科の理解が得られれば、出向きやすくなることはまちがいない。

(5)の飛び級制度は、1年間短縮するには少しなどと、考えるときには採用されやすいであろう。大学院と合わせれば1年間の短縮というケースも将来でる可能性はある。現在、かなりのお年を召している方々の中には、この飛び級の経験者も少なくないようだ。その頃の制度と、その後の経験をお聞かせ戴きたいものだ。

(6)、(7)は、ここでの議論の中心となる部分であり、後に回して、デメリットの面を考えると、(1)は、教員として給与を戴く限りは当然のことである。(2)は、一般の社会情勢とにらみ合わせて、教育機関にも、リストラが進みつつある現在では、OA機器の導入を上手に行えば解決しそうである。(3)の問題は、専門科目が細分化しすぎ、学科としての骨組みがおかしくなっている（学生も消化不良ぎみ）ので、カリキュラムの編

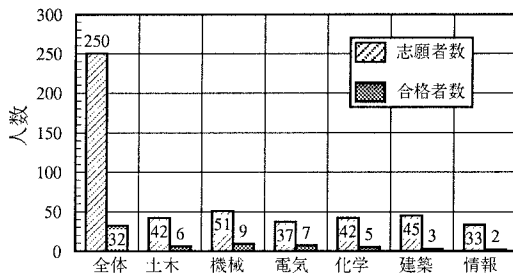


図2 志願者数と入試結果：1994年

(募集人数は、各学科若干名)

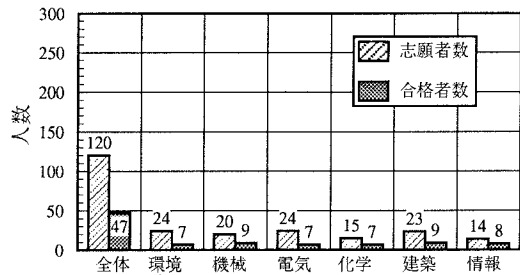


図3 志願者数と入試結果：1995年

(募集人数は、各学科10名、学科名称を変更)

成を仕直し、社会へ送り出すまでに最低限必要な履修科目とは何か、言い換えれば、教育機関としての役割を見極めた上での、カリキュラムを再構築する必要があると考える。

3. 10月入学制度の導入

3.1 実施の目的と受験の実態

セメスター制度のメリットでも示した、(6)、(7) は、帰国子女や10月入学生を受け入れるには都合の良い制度であり、真の国際化社会へ向けては必要不可欠なものであると考える。決して、本学部が導入したからではない。本学部でも導入するか否かの瀬戸際では、長時間におよぶ議論がなされた。その時など私とて、どちらかと言えば反対側であった。しかし、今では国際化だけではなく、受験、受験で追いまくられ、入学と同時に目的を見失うことの多い昨今の学生を、入学後安易な気持ちで大事な時期を過ごさないようにするためにも、受験機会を半年ごとに設けてやることは必要であると考えている。このような考えの基で、本学部の10月入学生の募集は始まった。初年度は、初めての試みでもあり、マスコミも駆け付けニュースでも取り上げられた。そのときの志願者数と合格者数は図2の通りである。しかし、本学は宣伝費を効率良く使うような土壤を持たない学校のせいか、2年目の昨年は、図3に示す結果まで志願者数が低下している。

3.2 新たな競争相手

私立大学には、当然、経営者側に法人がいて、我々教員サイドと意見が食い違うのは常である。図2、3に示した志願者数は決して法人側を満足させるものではない。多くの大学は、受験シーズンである2月、3月に2期入試と呼ばれる2度目の入試で、言わば、“落ち葉拾い”をして受験者を集めており、そちらの方が志願者数が多いと聞く。10月入試の受験資格は高校を卒業していることが条件となるために、浪人生が対象となる。そのためか、高校の教師と面談する機会に、この制度のことを伝えても、何か他人事を聞いているかの素振りで、通じていないと感じることが多かった。また、浪人生を相手にする予備校は、最大の競争相手であり、受験生の知恵袋を相手にするのは辛いものである。

3.3 就職での問題点

受験生が最も気になるのが就職であろう。日本は年度制をとっているの、4月に新卒一括採用となっている企業がほとんどである。しかし、視点を変えれば、人事計画も年2回立てられることになる。昨年は、10月にも採用計画をと提案していると報道されていた。実際、最近、参加したフォーラムでの、言わば一流企業の人事部の責任者の話によれば、これまでの年功序列型の雇用制度の崩壊とともに、年間を通じて、必要な部署に、必要な時に、必要な技量を持った人員を採用し、配置するような方向へ進めているようである。とはいえ、まだまだ、企業のトップは頭の硬い方々が多く、理想と現実にはギャップがあるとも聴いている。例え、現状がどうであれ、10月入学生が卒業する際には、本学科のスタッフは全力を上げて彼らの就職活動をバックアップしなければならない。

4. おわりに

一大学ではどうにもならない、社会構造まで見直す必要があるセメスター制+10月入学制度を導入した。より効率的で確実な制度にするためには、この入学制度に、多くの教育機関の賛同が望まれる。また、教育機関だけでなく、官公庁や企業サイドの雇用制度にも関わるので、それらの機関の方々にもご理解をいただきたい。我々は、1年あまり経つと卒論研究も半年ごとにスタートをきることになる。したがって、中だるみや休養を取る間もない忙しい日々がまちがいに到来する。その日を不安を感じつつも楽しみにしている。[名古屋'96]